

やわらかな感性で、しなやかに学び合う子どもの育成

9つの力を育む単元づくり

はじめに

本研究主題を掲げてから24年、わたしたちの生活やふるさと福島の現状も大きな変動を経験してきた。東日本大震災からの復興、情報機器や人工知能の発達による未知の課題など、未来を生きる子どもたちには、困難にもくじけず立ち向かうたくましさや、それぞれの状況に応じて柔軟に対応できるしなやかさが求められている。そうした背景を基に改訂された学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現により、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにすることが重要であると示された。また、国内外の現状に目を向けてみると、新型コロナウイルス感染症の影響で一変した生活様式や、地球温暖化の影響で毎年のように発生する自然災害への対応など、まさに解の見えない問題にどのように立ち向かっていくのかが求められている。未来を生きる子どもたちに育みたい力と、これまでわたしたちが求めてきた子どもの姿を照らし合わせたとき、**やわらかな感性**を働かせ、よりよい自分を求めて主体的に歩み出し、友だちや教師との「授業」という営みの中で、時には互いに共感し、時には意見を戦わせながら、対話を通して**しなやかに学び合う**子どもこそ、時代を超えて求めていく子どもの姿であると考え、令和4年度からの研究においても、「やわらかな感性で、しなやかに学び合う子ども」を継承していくこととした。

I 研究主題について

1 「9つの力」について

わたしたちは、「やわらかな感性で、しなやかに学び合う子ども」には、「どういった資質・能力を育成することが必要なのか」について幾度も協議を重ねてきた。そうした中で、「学習指導要領で求められている力はどのようなものか」「子どもたちが社会に出るときにどのような力が必要になっているのか」「福島三小の子どもの実態から、どのような力を育む必要があるのか」の三つの視点をもとに吟味を重ね、本校で育成をめざす「9つの力」を設定するに至った。

本校において設定した資質・能力の特色は、学習指導要領で示された「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の「三つの柱」について、本校教育目標の「知・徳・体」の視点からさらにそれぞれを分類し、いわば「9つの力」に整理したという点である。このように整理をしたことにより、各教科・領域における授業やそれぞれの学校行事等を通して、どのような資質・能力を子どもに育むべきかがより明確になったと考える。

＜本校で育成をめざす「9つの力」＞

	<p>＜確かな学力の向上（知）＞</p> <p>共に学ぶよさを味わいながら、主体的に追究し続ける子ども</p>	<p>＜豊かな人間性、社会性の育成（徳）＞</p> <p>自他のよさを認め、よりよい人間関係をつくることのできる子ども</p>	<p>＜体力の向上と健康・安全（体）＞</p> <p>自他の健康や安全に関心を持ち、進んで運動・行動する子ども</p>
生きて働く「知識及び技能」の習得	<p>・既得の知識及び技能と関連付けながら獲得した、様々な場面で活用できる知識及び技能</p>	<p>・様々な実践を通して獲得した、互いのよさを生かして協働するための知識及び技能</p>	<p>・危険から自他の身を守り、健康を保つとともに、自分の体力を高めるための知識及び技能</p>
未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成	<p>・自ら問いを見だし、多面的・多角的に考えながら、友だちと共に最適解を創り上げ、表現する力</p>	<p>・相手の考えに共感したり自己を表出したりしながら、自己理解や他者理解を深め、よりよい人間関係を築く力</p>	<p>・自分の課題を設定し、その場の状況や自分を取り巻く環境や心身の状態に応じて判断し、行動する力</p>
学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養	<p>・「人・もの・こと」に主体的にかかわり、多様性を認めながら、共に学ぶうとする態度</p> <p>・自らの学びを振り返り、粘り強く学び続けようとする態度</p>	<p>・自己への気づきを深め、あこがれに向かって、自己の感情や行動を統制しながら成長しようとする態度</p> <p>・寛容な心で他者のよさに目を向け、多様性を尊重しようとする態度</p>	<p>・体力向上や健康保持に、主体的かつ協働的に粘り強く取り組もうとする態度</p> <p>・基本的な生活習慣や望ましい食習慣及び安全などについて、正しい判断に基づき、自己を統制しようとする態度</p>

2 「ひとみ輝く子どもの学び」について

本研究では、以下の三つの子どもの学びを「ひとみ輝く子どもの学び」と定義付け、その具現をめざしている。

- ① 「高鳴る」学び・・・「人・もの・こと」に主体的にかかわり、自ら問いを見だし、粘り強く追究を続ける子どもの学び
- ② 「高め合う」学び・・・多様性を認めながら、友だちと共に最適解を創り上げようとする子どもの学び
- ③ 「つなげる」学び・・・これまでの経験や既存の知識及び技能と関連付けながら、考えを深めたり、よりよい自分を求めようとしたりする子どもの学び

3 「ひとみ輝く子どもの学び」を具現化する手立て

本研究では、子どもが今をたくましく生き、しなやかに未来を切り拓いていくために必要な資質・能力である「9つの力」の育成を最上位の目標に掲げ、そのためのよりよい授業づくりをめざしていくという考えから、「ひとみ輝く子どもの学び」の具現をめざしている。そして、その具体的な視点として、「子どもに学ぶ必要感があること」「問いや見方・考え方が学級全体で共有されること」「子どもが学びの履歴を生かし、見方・考え方を広げたり深めたりすること」という〈学びを深める三要素〉を基に授業づくりに努めている。

学びを深める三要素

- ① 子どもに学ぶ必要感があること
 - 子どもに出合わせる教材の開発、精選、吟味
 - 子どもと教材との出合わせ方の工夫
 - 子どもが学ぶ場の設定、環境の精選 など
- ② 問いや見方・考え方が学級全体で共有されること
 - 教師の見取りをもとにした意図的指名
 - 互いの考えの共通点や相違点の可視化
 - 友だちの考えを共有させるための再生や推測の活動
 - 子どもどうしのかかわりを促すための「待つ」「見守る」構え など
- ③ 子どもが学びの履歴を生かし、見方・考え方を広げたり深めたりすること
 - 子どもの学びの履歴を分析したり、変容を見取ったりする具体的な手立ての構築
 - 子どもの学びの履歴と教材、学習のねらいをつなげる教材分析 など

〈学びを深める三要素〉に基づいた授業づくりをする中で、わたしたちはいくつかの問いに直面した。それは、次のような問いである。

どのように学習を展開すれば、子どもは必要感をもって学ぶのであろうか。

学級全体で共有されるべき問いや見方・考え方にはどのようなものがあるのか。

見方・考え方を広げたり深めたりするための学びの履歴とは何だろうか。

教師の子ども一人一人の学びを見取る「眼」は的確であつただろうか。

これらの問いを考えるにつけ、単に1時間の授業を構想するだけでは不十分であるという事実を突きつけられた。前述の「ひとみ輝く子どもの学び」の事例で取り上げた子どもたちの姿は、決して、その時間だけで具現されたものではないからである。それまでの教師の働きかけ、教材との出会い、他者との交流など、単元展開の中で発揮され育まれた資質・能力の上に在るものである。それを教師は見通しながら、子どもの姿を見取り、単元を展開していく必要がある。真の意味で「9つの力」を子どもに育てているかどうか、単元を通して確かめなくてはならないという必要性が見えてきた。

Ⅱ 研究内容

1 育みたい資質・能力を明確にした単元計画

国立教育政策研究所によると、『内容のまとまりごとの評価規準』の考え方を踏まえて、学習評価を行う際の評価規準を作成することの重要性について強調している。(国立教育政策研究所・教育課程研究センター『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料)2020) また、田村学氏は著書の中で、次のように評価の視点をバランスよく配置することの必要性を説いている。

- 評価規準の数的なバランス：観点別、小単元別、時間数に応じた全体的な視点
- 評価規準の単元展開における変化：同一視点における時間経過による縦の視点
- 評価規準の小単元における関係性：同一活動内における横の視点
- 学習活動と評価規準との整合性：個別の学習活動内の視点

(田村学編著「資質・能力の育成と学習評価」(2022) 東洋館出版 p 36)

そこで、学習指導要領と学習活動、評価規準の三つの要素を吟味して、育みたい資質・能力を明確にした単元計画を作成することにした。

4 単元の計画(総時数26時間)

(1) 単元の評価規準

単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
第三地区の町探検を通して、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かって	第三地区の町探検を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えている。	第三地区の町探検を通して、それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとしている。	
① 地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々が自分と関わっていることが分かって	① 地域の場所や人々を思い起こし、地域の様子について友だちと交流している。	① 地域の場所や人々に関わることへの関心や期待をもちながら、それらと繰り返し関わろうとしている。	
② 様々な人々に関わったりする際、相手や場に応じたあいさつや言葉遣いをしたり、訪問や連絡、依頼を適切に行ったりしている。	② 地域の場所におけるふさわしい行動を予想しながら、活動の計画を立てたり、約束を決めたりしている。	② 地域の場所や人々に応じて、適切に接したり安全に活動したりしようとしている。	
③ 地域の親しみを感じている人や愛着のある場所が自分たちの生活を楽しくしていることに気付いている。	③ 地域の場所や人々を自分の生活と関連付けながら、捉えている。	③ 地域の場所や人々の親しみや愛着をもって、それらのよさを大切にしようとしている。	
	④ 好きになった場所や働くようになった人々などのことを振り返りながら、友だちや地域の人に知らせている。		

評価規準においては、育みたい資質・能力を三つの柱にそって記述する。同一視点における縦の変化が捉えやすい。

小単元別における、育みたい資質・能力の横の視点が捉えやすい。

学習活動と育みたい資質・能力との整合性が捉えやすい。

育みたい資質・能力の数的なバランスが捉えやすい。

(2) 指導と評価の計画

小単元名(時間)	学習活動(時間)	知	思	態
みんなで町探検をしよう(11)	・第三地区には、どんな場所やものがあるのか知っていることを出し合う。(1) ・4コースの町探検の計画を立てて探検する。(8) ・町探検で見付けたことや疑問に思ったことを絵や文で表現したり、友だちに伝えたりする。(本時2/2)	①	①	①
気になるところに出かけよう(5)	・気になる場所や人について話し合う。(1) ・グループごとに町探検の計画を立て探検する。(2) ・グループごとに町探検を振り返る。(1)	②	②	
お気に入りを見つけたよ(5)	・お気に入りの場所や人について話し合う。(1) ・グループごとに町探検の計画を立て探検する。(2) ・グループごとに町探検を振り返る。(1)		③	②
町のいいところをつたえ合おう(5)	・町探検報告会の計画を立てる。(1) ・町探検報告会の準備をする。(2) ・町探検報告会をする。(1) ・町探検で楽しかったことを絵や文で表現したり、友だち	③	④	③

2 授業研究会の充実

教育研究の柱は授業である。「ひとみ輝く子どもの学び」の具現をめざし、育みたい資質・能力を明確にした単元計画が、意図する方向に展開しているか確かめる必要がある。この点、多くの教師の眼で子どもたち一人一人の学びを見取ることで、そのことがより明らかになる。そこで、多くの教師の眼で授業における子どもの学びの姿を見取ることができるよう、授業者は年に3回授業研究会を実施することとした。

3 単元づくりについての研修

生活科や総合的な学習の時間、特別支援教育の自立活動や生活単元学習においては、育みたい資質・能力を明確にしながら、子どもたちに出合わせるべき価値ある教材を吟味し、子どもの思考を想定しながら一から単元づくりをすることが求められる。しかしながら、それは容易なことではない。そこで、単元づくりの考え方について全体で共有する場を設けることとした。単元を一から作るとはどういうことか、どうすれば子どもの資質・能力を育む単元の展開ができるのかについて研修し、自分の学級で展開していく単元が、それに照らして適切かどうかを同僚と協議することで、単元づくりの在り方について深く学び、教師の見取りに生かすことができるようにする。

Ⅲ 研究の方法

- (1) 授業づくりにおいては、「学びを深める三要素」の視点を大切にし、研究教科・領域を生活科・総合的な学習の時間・特別支援教育の3つに絞り、同じ方向性をもって授業実践を行う。
- (2) 子どもの発達段階に応じた学びとなるように、生活科(低学年)・中学年・高学年・特別支援(情緒・病弱)・特別支援(知的)のブロックに分かれ、各ブロックを中心とした研究を進める。
- (3) 各学年に外部から指導助言者を招聘し、継続的に指導をしていただきながら研究を進めていく。
- (4) 授業者は年に3回授業研究会を実施することとし、そのうち1回は、全教員で授業を参観し、事後研究会を行う「全体授業」を設定し、授業力の向上をめざす。
- (5) 自主研究公開を開催して授業を公開し(令和4年11月25日)、研究の成果を発信する。
- (6) 授業実践では、育みたい資質・能力を明らかにした単元計画を作成し、授業において「ひとみ輝く子どもの学び」が具現されたか、単元計画と照らして子どもの具体的な学びを振り返る。
- (7) 子ども自身に学びの成果が実感できたかを捉えるために、行動や発言、ノートやワークシートなどの記録を累積するとともに、アンケートを実施する。
- (8) 授業者は、印象に残った子どもの学びについて実践記録としてまとめる。「単元を通して子どもを見取る眼」を大切にしながら単元をつくり、〈学びを深める三要素〉に基づいた授業づくりに努めたことで、どのように「9つの力」を育むことにつながったかを考察する。
- (9) 運動会や音楽祭といった学校行事に向けて、事前、事後に研究会を設け、具体的な子どもの姿を語り合う場を設ける。これにより、見取りの視点を共有し、教師の見取りの眼を鍛えていく。

IV 研究の実践

1 第1学年 生活科「いっしょにあそぼう」の実践から

別添資料参照（実践記録）

2 第4学年 総合的な学習の時間「大好き！おみさか花広場」の実践から

別添資料参照（実践記録）

V 研究の成果と課題

(1) 育みたい資質・能力を明確にした単元計画

- 単元計画に照らして、子どもの学びが意図する方向に展開しているか指導にあたり、「ひとみ輝く子どもの学び」が具現されたかを振り返ったりして、日々の授業改善に努めることができた。
- 「実践記録」という形で、「単元」を通して子どもがどのような資質・能力を発揮していたかという事実を、教師の「見取り」により具体的に提示できた。

(2) 授業研究会の充実

- 「ひとみ輝く子どもの学び」の具現をめざし、授業研究を積み重ねてきたことで、子どもの学びを見取る「眼」が鍛えられ、教師自身の「在り方」を見つめ直し、授業力の向上につながった。

(3) 単元づくりについての研修

- 自分の学級で展開していく単元が、それに照らして適切かどうかを同僚と協議することで、単元づくりの在り方について深く学び、教師の見取りに生かすことができた。
- 目の前の子どもの実態を基に、子どもが必要感をもって学びながら、資質・能力を育み発揮できる単元を開発していくためには、教師の「在り方」も見つめ直していく必要がある。

(4) 行事における子どもの姿の省察

- 「9つの力」は教育活動の全ての場面を通して育成するものであり、教育活動で育成すべき資質・能力を吟味していくことの重要性を示すことができた。

(5) 今後の課題

- 子どもへのアンケート結果では、「多面的・多角的に考え最適解を創り上げる」という「問題解決」の力の育成について課題があることが分かった。子どもが見方・考え方を広げたり深めたりすることのよさを実感できるよう、授業づくりを工夫・改善していく必要がある。